

<グローバル資料展示> について

— 図書館の中の世界旅行 —

「グローバル化」という言葉が、国際社会の変革の方向性を考えていく上で、その是非も含め、ますます重要なキーワードとなってきています。国家の在り方や政治・経済・文化、あらゆる分野で、グローバルな視点で考えてみるのが不可欠になってきています。

図書館には、グローバル化の関連資料が数多く所蔵されていますが、各国の地理・地誌・歴史・文化・宗教などのほかにも政治、経済、社会など、共時的・通時的に、広範囲に分散して配架されています。複数のキーワードを効果的に用いて、資料を検索する必要があります。

今回の展示では、豊田図書館長（観光学部）個人蔵の民俗資料をお借りし、先生の研究分野のひとつから、「パプアニューギニアにおける国家の表象」というテーマで、「国を展示する」（『展示の政治学』2009 所収）などの論考をもとに解説していただきました。



立教大学図書館

<パプアニューギニアと国家の問題を考えるための本>

- アンダーソン、ベネディクト（白石隆，白石さや訳）『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』リブレポート、1987 年
- ゲルナー・A（加藤節監訳）『民族とナショナリズム』岩波書店、2000 年
- スミス、アントニー・D（巢山靖司，高城和義他訳）『ネイションとエスニシティ：歴史社会学的考察』名古屋大学出版会、1999 年
- 山本真鳥編『オセアニア史』山川出版社、2000 年
- 畑中幸子編著『ニューギニアから石斧が消えていく日：人類学者の回想録』明石書店、2015 年
- 塩田光喜『石斧と十字架：パプアニューギニア・インボング年代記』彩流社、2014 年
- 平田晴敏著『ニューギニアの贈りもの：パプアニューギニアからイリアンジャヤへ』現代書館、2001 年

グローバル資料展示

<パプアニューギニアにおける国家の表象>

観光学部教授・図書館長 豊田 由貴夫

はじめに

現在、我々の世界は「国」という領域に区分されており、我々の多くはその「国」があたかも昔から存在しており、その存在が当たり前であるかのように考えている。しかし当然ながら、「国」は人間の始まりとともに存在していたわけではない。我々が目にしていく「近代国家」という存在が地球を覆うようになったのはせいぜいこの数百年であり、地域によっては数十年しかたっていない国家も存在している。

パプアニューギニアはそのような、生まれてからまだ40年ほどしか経っていない若い国である。そして国として若いだけでなく、国が成立する以前にその母体となった民族や地域がなかったという点でも珍しい国である。パプアニューギニアとその

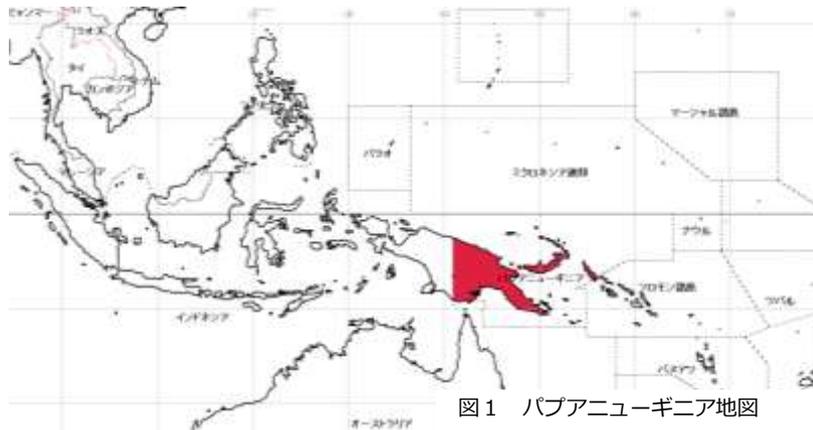


図1 パプアニューギニア地図

周辺地域は世界でも言語が多様な地域であり、パプアニューギニアだけで800の言語が存在していると言われている。言語は民族を区分する基本的な指標とされるので、800の民族が存在していると言ってもよいことになる。そして独立以前に国の母体となる集団があったわけではなく、独立に際しては、旧宗主国のオーストラリアが、植民地は独立すべきだという世界的な世論の圧力を受けて、この地域を独立させる方針を決めたといつてよい。800の民族の地域が、ある時点から国として独立することになったのである。つまりパプアニューギニアの独立は「内から求めた」独立ではなく、「外から与えられた」独立であった。そしてこの結果として、独立してから40年経った今でも国民は国を意識する度合いが少なく、また国家に対するアイデンティティも希薄なのである。

このような状況に対して、国を統括・管理する立場からは、国民に対して、国を意識させ、国に対する強いアイデンティティを持たせることが重要な課題となる。同時に国外に対しては、国家が統一された状況を明確に示し、それが「正当な」近代国家であることを示すことが課題となる。これは国が独立して40年経った現在でも続けられている。いわばパプアニューギニアでは、国家が今まさに作られている状況であり、その過程をリアルタイムで見られるのである。



図2 パプアニューギニアの国会議事堂



図3 アラベシュ地域のハウス・タンバラン（精霊の家）

パプアニューギニアの国会議事堂

国民に国家を意識させるために、「視覚」を通じて目に見える形で訴えている事例がある。ここでは、そのようなものの典型的な事例として、一九八四年に建設された国会議事堂の例を見てみよう（図2）。他の多くの国の国会議事堂がそうであるように、パプアニューギニアの国会議事堂もまた、国の威信をかけて建築されたものである。

建物の正面はセピック地域のアラベシュ民族の「精霊の家」の正面を模している（図3）。これによってパプアニューギニアの「伝統的な」デザインが使用されていることが強調されている。全体のデザインはオー



図4 国会議事堂の正面議事堂

ストラリア人の建築家によるが、正面のパネルは国立芸術学校のメンバーとの共同作業によって生まれたものである。

この正面のパネルに着目してみると、そこではパプアニューギニアという国家の多様性が示されている。図柄の中にはヤムイモやタロイモが描かれ、パプアニューギニアの農作物が表され、また重要な家畜であるブタが柵に囲まれて描かれており、同時に川・海に魚が泳いでいる図も描かれている。パプアニューギニア国内での生業の多様さがここで示されている。

さらに地域的な多様性ばかりではなく、そのほかの対立的要素も示されている。例えば、図柄の上部では、ヘリコプターとヒクイドリが対置されている。近代技術の象徴的な存在としてヘリコプターが描かれ、同時に土着の生き物としてヒクイドリが対置されて描かれることにより、近代化と伝統的なものが対照的に描かれている。

以上のように、ここで示されているのはパプアニューギニア全体の多様性と同時に、それらの多様性が一つに融合されているという考えの強調である。パプアニューギニア国内には様々な多様性、そして近代と伝統との対照性などが存在するが、このパネルではそれらが融合していることが強調される。そしてこのような多様性が融合されていることを示すことにより、パプアニューギニア国民にパプアニューギニアという国家を意識させるための工夫が施されているのである。

伝統的なデザインとその応用

パプアニューギニアは美術界では「未開芸術」や「原始美術」と呼ばれるようなデザインで有名な地域である。伝統的な木彫作品として仮面や祖先像が多数作られてきた。そしてこのような作品群は独自の「未開性」のデザインにより、パプアニューギニア独自のものとして評価されてきた。特にセビック流域の木彫作品はそのおどろおどろしさで有名である（図5）。これは近代的なホテルなどでも、パプアニューギニアらしさを示すために使われている（図6）。

このような伝統的なデザインが、国を象徴する建物に使われている例として、パプアニューギニア銀行（Papua New Guinea Banking Corporation）の本店のデザインがある（図7）。パプアニューギニア銀行はパプアニューギニアの国立の銀行であり、この建物はその本店であることから、国会議事堂と同様に国家の象徴という性格が非常に強いものである¹。

正面の壁のデザインは独特のものであるが、実はこれはパプアニューギニアの南側の海岸であるガルフ地域の伝統的な仮面と盾のデザインを基本としている（図8）。

ここで興味深いのは、特定の地域であるガルフ地域の伝統的なデザインをそのまま踏襲しているわけではなく、多少デフォルメして使用している点である。伝統的なデザインは図七のようなものであるが、このようなデザインをそのまま使用するのではなく、その曲線の部分を強調しながら、その特



図7 パプアニューギニア銀行本店の壁



図8 ガルフ地方の仮面

定の地域の地域性を薄める、あるいは中立化させるようなやり方をしている。そしてこれを見てガルフ地域という特定の地域が想起されることなく、漠然とパプアニューギニアという国家を想起させるようなデザインとしているのである。ここで強調されているのは、パプアニューギニアの特定の地域が突出して描かれることがないように、という工夫である。そこには国家の中の特定の地域を意識させず、国家全体を意識させようという意図を見てとることができる。国家の中の一部の地域だけが強調されるのでは、パプアニューギニアという国家は強調されなくなり、国民に国家という意識を強くもってもらうためには不都合なのである。



図5 パプアニューギニアの彫像



図6 ホテルに置かれた彫像

¹ 現在、パプアニューギニア銀行は、民営化により南太平洋銀行(Bank of South Pacific)となっている

マッドメン

漫画家の諸星大二郎が「マッドメン」という漫画を描いている。マッドメンというのはパプアニューギニアのある地域の独自の格好であり、土でできた仮面（土面）をかぶり、草の腰蓑を付け、全身を白く塗った格好をしている（図9）。諸星大二郎は独自の解釈を施して漫画のキャラクターに仕立てているが、元はパプアニューギニア高地のアサロ地域が発祥の地である。奇妙なデザインの土面から、パプアニューギニアの独自の民族衣装として有名になっている。実はこれは「創られた伝統」の一例としてよいものである。

今では多くのガイドブックがマッドメンの「伝説」を語っている。その伝説には数多くのバージョンがあるのだが、概略は以下のようなものである。

部族間戦争でアサロ渓谷の住民は負けてばかりいた。ある日、アサロの住民はいつものように川岸の泥の地域に追い込まれ、仕方なく夜までそこに隠れていた。泥にまみれたアサロの住民がこっそり逃げようとした時、敵に見つかってしまった。しかしその敵は白い泥にまみれたアサロの住民を見て、死者が復讐をしにやってきたと勘違いをした。パプアニューギニアの多くの地域で、死者は白い姿をしていると信じられているのである。敵はパニックに陥り、夢中で逃げた。この出来事からアサロの住民は泥の威力を知り、泥の仮面を作って戦争に使うようになった。それ以降、アサロの住民は戦争で負けないようになったのだ。

パプアニューギニアを紹介する時に、いくつかの民族が代表的なものとして紹介されるのだが、現在マッドメンはそのような場で必ず紹介されるようになる。その格好の独自性に加え、「未開性」が強く出ていて、仮面という魅力もあるのだろう。観光用のポスターにも使われ、国際空港の壁絵にも描かれている（図10）。パプアニューギニアのトヨタ車の宣伝でもマッドメンが使われていて、今ではゴクラクチョウ、キナ貝とともに、パプアニューギニアという国の「象徴」とでもいうべき存在になっている。

しかし実際のマッドメンの歴史はそれほど古くない。1957年に民族舞踊を集めたショーが行われることになったが、ある男が他の地域からヒントを得て作った泥の仮面を紹介した。これがマッドメンの始まりである。これが評判になり、他の地域のショーでも招待されるようになった。今やパプアニューギニアの「伝統的な」民族衣装の典型例として紹介されるが、わずか50年ほどの歴史を持つにすぎないのである。



図9 マッドメン



図10 国際空港に描かれるマッドメン